

二〇一七年度

普連土学園中学校 入学試験問題

二〇一七年 二月四日実施

国語

三次

- 一、問題に答える時間は六十分です。
- 二、問題は、

 ～

 まであります。
- 三、答はすべて、「解答题紙」に記入しなさい。
- 四、「解答题紙」は中に二枚はさんであります。

問題一

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

日本人は自己主張が苦手だと言われる。グローバル化の時代だし、もっと自己主張ができるようにならないといけないなどと言う人もいる。でも、日本人が自己主張が苦手なものには理由がある。そして、それはけっして悪いことではない。

では、アメリカ人は堂々と自己主張ができるのに、僕たち日本人はなぜうまく自己主張ができないのか。

それは、そもそも日本人とアメリカ人では自己のあり方が違っていて、①コミュニケーションの法則がまったく違っているからだ。

アメリカ人にとって、コミュニケーションの最も重要な役割は、相手を説得し、自分の意見を通すことだ。お互いにそういうつもりでコミュニケーションをするため、遠慮のない自己主張がぶつかり合う。②お互いの意見がぶつかり合うのは日常茶飯事なため、まったく気にならない。

a、日本人にとって、コミュニケーションの最も重要な役割は何だろう。相手を説得して自分の意見を通すことだろうか。そうではないだろう。僕たちは、自分の意見を通そうというより前に、相手はどうしたいんだろう、どんな考えなんだろうと、相手の意向を気にする。そして、できることなら相手の期待を裏切らないような方向に話をまとめたと思う。意見が対立するようなことはできるだけ避けたい。そうでないと気まずい。

つまり、僕たち日本人にとっては、コミュニケーションの最も重要な役割は、お互いの気持ちを結びつけ、良好な場の雰囲気醸し出すことなのだ。強烈な自己主張によって相手を説き伏せることではない。

だから自己主張のスキルを磨かずに育つことになる。自己主張が苦手なのは当然なのだ。その代わりに相手の気持ちを察する共感性を磨いて育つため、相手の意向や気持ちを汲み取ることができる。

相手の意向を汲み取って動くというのは、僕たち日本人の行動原理といってもいい。コミュニケーションの場面だけではない。b、何かを頑張るとき、ひたすら自分のためというのが欧米式だとすると、僕たち日本人は、だれかのためという思いがわりと大きい。

親を喜ばせるため、あるいは親を悲しませないために勉強を頑張る、ピアノを頑張る。先生の期待を裏切らないためにき

ちんと役割を果たす。そんなところが多分にある。大人だって、監督かんぐくのために何としても優勝ゆうしょうしたいなんて言ったりするし、優勝すると監督の期待に応えることができてホッとしていると言ったりする。

③ 自分の中に息づいているだれかのために頑張るのだ。もちろん自分のためでもあるのだが、自分だけのためではない。このような人の意向や期待を気にする日本的な心のあり方は、「他人の意向を気にするなんて自主性がない」とか「自分がない」などと批判されることがある。でも、④ それは欧米的な価値観に染まった見方に過ぎない。

教育心理学者の東洋あずまひろしは、日本人の他者志向を未熟とみなすのは欧米流であって、他者との絆きずなを強化し、他者との絆を自分の中に取り込んでいくのも、ひとつの発達の方向性とみなすべきではないかという（東洋『日本人のしつけと教育——発達の日米比較かくにもとづいて』東京大学出版会、一九九四年）。

そもそも欧米人と日本人では自己のあり方が違う。僕たち日本人が、率直な自己主張をぶつけ合って議論するよりも、だれも傷つけないように気をつかい、気まづくならないように配慮するのも、欧米人のように個を生きているのではなくて、関係性を生きているからだ。

心理学者のマークスと北山忍きたやましのぶは、アメリカ的な独立的自己観と日本的な相互協動的自己観を対比させている。

独立的自己観では、個人の自己は他者や状況きょうじょうといった社会的文脈から切り離はなされ、そうしたものの影響えいきやうを受けない独自の存在とみなされる。そのため個人の行動は本人自身の意向によって決まると考える。

それに対して、相互協動的自己観では、個人の自己は他者や状況といった社会的文脈と強く結びついており、そうしたものの影響を強く受けるとみなされる。そのため個人の行動は他者との関係性や周囲の状況に大いに左右されると考える。

このような相互協動的自己観をもつ僕たち日本人は、個としての自己を生きているのではなく、関係性としての自己を生きている。関係性としての自己は、相手との関係に依よりてさまざまに姿を変える。その場その場の関係性にふさわしい自分になる。⑤ 相手との関係性によって言葉づかいまで違ってくる。欧米人のように相手との関係性に影響を受けない一定不変の自己などというものはない。

⑥ 「だれが何と言おうと、私はこう考える」「僕はこう思う」と自分を押し出していく欧米社会では視線恐怖きんぷがあまり見られないのに対して、自分を押し出すよりも相手の意向を汲み取ろうとする日本人の間には視線恐怖が多い。それは、僕たち

日本人は、相手との関係性によって自分の出方を変えなければならぬからだ。

相手がどう思っているかが気になる。こんなことを言ったら相手はどう感じるだろうかと気になる。それも、僕たちが関係性としての自己を生きているからだ。

僕たちの自己は、相手から独立したものではありません、相手との相互依存いに基づくものであり、間柄がらによって形を変える。僕たちの自己は、⑦ 相手にとつての「あなた」の要素を取り込む必要がある。だから相手の意向が気になる。相手の視線が気になるのだ。

個を生きているのなら、自分の心の中をじっくり振り返り、自分のしたいことをすればいいし、自分の言いたいことを言えばいい。相手が何を思い、何を感じているかは関係ない。自分が何を思い、何を感じているかが問題なのだ。自分の思うことを言う。自分が正しいと考えることを主張する。自分の要求をハッキリと伝える。それでいいわけで、じつにシンプルだ。

c、関係性を生きるとなると、そんなふうにシンプルにはいかない。自分の意見を言う前に相手の意向をつかむ必要がある。気まずくならないようにすることが何よりも重要なので、遠慮のない自己主張は禁物だ。相手の意見や要求を汲み取り、それを自分の意見や要求に取り込みつつ、こちらの意向を主張しなければならぬ。

このように関係性としての自己を生きる僕たち日本人は、たえず人の目を意識することになる。

関係性を生きる僕たちの自己のあり方は、「人間」という言葉にもあらわれている。

哲学者の和辻哲郎わつじてつろうは、「人間」という言葉の成り立ちについて疑問を提起している。「人」という言葉に「間」という言葉をわざわざ付けた「人間」という言葉が、なぜまた「人」と同じ意味になるのかというのだ（和辻哲郎『人間の学としての倫理学』岩波書店、一九三四年）。

「人」だけでもいいのに、なぜわざわざ「人間」というのか。なぜ「間」を付けても意味が変わらないのか。ふだん当たり前のように使っている「人間」という言葉だが、改めてそう言われてみると、たしかに妙だ。

和辻によれば、辞書『言海げんかい』に、その事情が記されている。もともと人間という言葉は「よのなか」「世間」を意味していたのだそうだ。それが「俗ぞくに誤あやって人の意になった」。

d、「人間」というのは、もともとは「人の間」、言い換え

れば「人間関係」を意味する言葉だったのに、誤って「人」の意味に使われるようになったのだという。

誤って使われたのだとしても、^⑧なぜまたそんな誤りが定着したのか。そこにこそ大きな意味があるのではないか。

和辻は、このような混同は他の言語ではみられないのではないかという。ドイツ語でもこんな混同はみられないし、中国語でも人間とはあくまでも世間を指し、人を指したりはしない。他の言語では「人」と「人間関係」がしっかりと区別されているのに、日本でのみ混同があるとすれば、そこには日本的な「人」のとらえ方の特徴^{ちゆう}があらわれているはずだ。

ここからわかるのは、日本文化には、「人」人間関係」というような見方が根づいているということだ。

和辻は、そのところをつぎのように説明する。もし、「人」が人間関係とはまったく別ものとしてとらえられているのであれば、「人」と「人間関係」を明確に区別すべきだろう。それなのに、日本語では「人」と「人間関係」を区別せずに、「人間関係」や「よのなか」を意味する「人間」という言葉が「人」の意味で用いられるようになった。ここにこそ、日本的な「人」のあり方が示されている。

^⑨僕たち日本人にとって、「人間」は社会であるとともに個人なのだ。

このように、日本文化のもとで自己形成をした僕たちの自分というのは、個としてあるのではなく、人とのつながりの中にある。かかわる相手との間にある。

一定不変の自分というのではなく、相手との関係にふさわしい自分がその都度生成するのだ。相手あつての自分であり、相手との関係に応じて自分の形を変えなければならぬ。

(^{えのもと}榎本 ^{ひろあき}博明 『自分らしき』 って何だろう？ 自分と向き合う心理学』 ちくまプリマー新書)

問一 文中の a e に当てはまる語として、最も適当なものを次のア～キから選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア あるいは イ 一方 ウ だからこそ エ たとえば

オ つまり カ でも キ なぜなら

問二 — 線部① 「コミュニケーションの法則がまったく違っている」とありますが、日本人のコミュニケーションにおいてはどのようなことが重要ですか。本文中から三十文字以内の部分抜き出し、最初と最後のそれぞれ五字を答えなさい。

問三 — 線部② 「お互いの意見がぶつかり合うのは日常茶飯事」とありますが、アメリカ人にとって「お互いの意見がぶつかり合う」ことが「日常茶飯事」になるのはなぜですか。説明しなさい。

問四 — 線部③ 「自分の中に息づいているだれかのために頑張るのだ」とありますが、なぜ日本人はこのような行動をとるのですか。説明しなさい。

問五 — 線部④ 「それ」の指し示す内容を答えなさい。

問六 — 線部⑤ 「相手との関係性によって言葉づかいまで違って来る」とありますが、次の1～5について、その身近な例として適当なものには「○」、不適当なものには「×」で答えなさい。

1 姉とはいつもは対等な言葉づかいで話しているが、姉の婚約者が家に来ている時は、姉に丁寧な言葉づかいで話しかけるようにしている。

2 学校で友達とおしゃべりをしていた時に、後ろから突然話しかけられたので乱暴な言葉づかいで返事をしたが、先生だったので、慌てて敬語で言い直した。

3 しょっちゅう遊びにくる姉の友人に最初は敬語を使っていたが、だんだん親しくなってきた、友達のような言葉づかいで話すようになった。

4 いつも荒っぽい言葉づかいで話しているのに、好きな男の子と話をする時だけは、おしとやかな言葉づかいで話してしまう。

5 普段はぞんざいな言葉づかいをしている母に、入試に無事合格した際には、改まった言葉づかいでこれまでの感謝の気持ちを伝えた。

問七 —— 線部⑥ 「『だれが何と言おうと、私はこう考える』『僕はこう思う』と自分を押し出していく欧米社会」とありますが、欧米社会において「自分を押し出していく」のは、「自分」というものがどのようなものだと考えられているからですか。本文中から四十五字以内の部分抜き出し、最初と最後のそれぞれ五字を答えなさい。

問八 —— 線部⑦ 「相手にとつての『あなた』の要素」とはどういうことですか。答えなさい。

問九 —— 線部⑧ 「なぜまたそんな誤りが定着したのか」とありますが、なぜ「そんな誤りが定着した」のだと筆者は考えていますか。説明しなさい。

問十 —— 線部⑨ 「僕たち日本人にとつて、『人間』は社会であるとともに個人なのだ」とありますが、このような見方からすると、日本人にとつての「自分」とはどのようなものだと考えられますか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 相手との関わりとは関係なく、どんな時も変化することのない、生まれもつたものとして存在するもの。
- イ 個人として一定不変ではなく、人からどのように見られるかという他者の視線によつて決まるもの。
- ウ 個としてではなく、日本文化との関わりの中で、日本的な心のあり方を持つものとして形成されるもの。
- エ 人間関係を壊さないように、相手によつて都合のいいように形を変えていくもの。
- オ 不変のものではなく、関わる相手との関係性によつてその都度適切なものに形を変えるもの。

問題二

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

中学二年生の市居一真は、一年の時に転校してきた井嶋杏里と出会い、彼女をモデルとして絵を描き、市の展覧会に出品したが入賞はできなかった。再び杏里をモデルに絵を描きたいと願っている一真だったが、父一成は一真が絵を描くことに反対で、「絵を描くのは中学まで」と一方的に告げられて、焦りを感じていた。

至福の時間は、これからも続く。一真は信じていた。

それが、今朝、こなごなに砕けた。引き千切られた。

「ばかもの、いいかげんにしろ」

父の怒声が耳に響く。

今朝、朝食を終え、部屋に戻った一真はその場に立ち竦んだ。

父が立っていたのだ。

イーゼルに立てかけられたカンバスを前にして、恐ろしいほど顔をゆがめていた。足元にスケッチブックが散乱していた。

「父さん、おれの部屋で何を」

してるんだと言いかけて、一真は息を飲みこんだ。父の手にナイフが握られていたからだ。ペーパーナイフの刃がきらめく。それは、まっすぐにカンバスに突き立てられた。

杏里が悲鳴をあげた。ここにいるはずのない杏里の悲鳴を確かに聞いた。いや、一真自身が叫んだのだ。

「何してるんだ。やめろ」

叫びながら父にぶつかっていく。父はよろめきイーゼルにぶつかる。斜めに裂かれたカンバスが倒れた。一真はさらに叫び声をあげる。

「絵が、おれの絵が！」

父をにらみ、一真は叫び続けた。

「何で、何でこんなことをするんだ！ ふざけるな」

「ふざけているのはどつちだ。こんな絵ばかり描いていて、どうする。おまえは何を考えてるんだ」
「絵を描いちゃ悪いのかよ」

「おまえはもう中二だぞ。こんな遊びにうつつを抜かしているヒマはないだろうが」

「遊びじゃない、本気だ」

「なに」

「おれは画家になるんだ。一生、絵を描いていくんだ」

「ばかもの、いいかげんにしろ」

怒声とともに頬を打たれた。容赦ない、激しい打ち方だった。

「許さんぞ。絶対、許さんぞ。画家なんて……絶対許さんからな」

父の唇がわなわなと震える。

「なんでだ、なんでだよ。なんでそこまで憎むんだ」

憎むと口にして、一真は目を見張った。

父は絵を憎んでいるのか。

「うるさい。ともかく、許さん。ここにある道具は全て捨てる。燃やしてしまえ」

「いやだ」

「できないなら出て行け」

一真はスケッチブックを抱えると、そのまま部屋を飛び出した。母が名前を呼ぶ。振り返らない。

……中略……

描きたいのだ。

杏里を描きたい。

一真を支配している最も強い想いだ。その想いの前には他のどんな情も薄れ、色あせ、しばみ、縮んでいく。なんで、ここまで描くことにこだわるのだろう。怖いほどだ。

①「やはり、おじいちゃんの血をひいているのかしらね」

母の祥子^{さちこ}がため息をついたあと、そうささやいた。

二時間ほど前のことだ。水鳥公園近くに全国チェーンのファーストフード店がある。二時間前、店内の一隅^{くぐ}で母と向かい合っていた。

「やはり、おじいちゃんの血をひいているのかしらね」

絵を描くという道を選びたい。息子^{むす}の決意を聞いて、祥子はため息をつき、独り言のようにささやいたのだ。

「おじいちゃん？」

母親と向かい合ってジュースを飲んでいるなんて、十四歳^{さい}の身には気恥^はずかしすぎる。席に着いてからずっとうつむきかげんだった顔を上げ、一真は母を見つめた。

「おじいちゃんって、おれのおじいちゃん？」

祥子がうなずく。ストローでアイスコーヒーをかき回し、もう一度ため息をついた。

「そうよ。お父さんのお父さん」

「親父^{おやじ}の！」

驚^{おどろ}いた。父、一成は高校生のとき父親と、二十歳を過ぎたころ母親と死に別れた。そればかりか、たった一人の兄も一真が生まれて間もなくのころ、故郷の街で病死したのだ。だから、文字通り天涯^{がいこ}孤独な身の上だった。

「家族と呼べるのは、おまえたちだけだ」

珍^{めづ}しく酔^よっぱらった一成が一真と祥子を前にして語ったことがある。これも珍しく、ほろりと湿^{しめ}った口調だった。

一成の父、一真の祖父にあたる人は繊維^{せんい}関係の会社に勤めていたが、出張先で事故に遭^あい亡くなった。

一真が祖父について知っているのはそれくらいだった。顔も知らない。写真が一枚もないのだ。祖母の写真は何枚かあって、和服姿で微笑^{ほほ}んでいる一枚は真鍮^{しんちゆう}の写真立てに入れられ、リビングに飾^{かざ}られていた。面長の顔立ちの、淋^{さび}しげだけれどきれいな人だった。

生まれた時にはすでに、祖父も祖母もいなかったのだから、祖父の写真がないことにそれほど違和感はない。もっと、正直に言ってしまうえば、若い一真にとって、何十年も前に亡くなった人たちなど、ほとんど関心の対象にならなかったのだ。しかし……。

「おじいちゃんって、画家だったわけ？」

「ええ。それほど有名じゃないけれど……有名になる前に亡くなったみたい」
母の方に身を乗り出す。② 気恥ずかしさなど吹っ飛んでいた。

「ちゃんと話してよ。もしかして、親父が絵を描くことをあんなに嫌うのは、おじいちゃんと関係があるわけ？」

「そうよ。だから、あんたにちゃんと話をしとかなきゃって思ったの。お父さんは絶対にしゃべるなって言うけれど、このままじゃ、一真ももやもやしたまま、どうしていいかわからないものね」

三度目のため息をつき、祥子は話を続けた。

「おじいちゃんは最初は普通のサラリーマンだったけれど、昔からの夢だった画家の道を諦めきれないで、会社を退職してしまったの。それで、各地を放浪しながら絵を描くようになって……。つまり、奥さんと子ども、おばあちゃんとお父さんや伯父さんのことね……家族を残して家を出てしまったの。お父さんがまだ小学生のときだったんですって。それから、おばあちゃんが苦勞して、苦勞して、二人の息子を育てたの。おじいちゃんは、時々、ふらりと帰ってきてはしばらく家にいるんだけど、また、ふらりと出て行っては何か月も帰ってこない。その繰り返したんですって。そして、お父さんが高校に入学した春、北海道の小さな町の病院で息を引き取ったそうよ。事故だったらしいわ。荷物の中に家族全員で写っている写真と住所を記したメモ帳があつて、それで……警察の人が家族と連絡をとれたの。おばあちゃん、北海道まで遺体を引き取りにいったそうよ。お父さんは『あんなやつ父親じゃない。引き取りに行く必要ないだろう』って言ったけれど、おばあちゃんはね、『あの人は絵を描くことに魅入られてしまった、かわいそうな人なんだ』と答えたそうよ。お父さんね、おじいちゃんが家に帰っていたとき、尋ねたことがあるんだって。どうして、家族を捨ててまで絵を描くんだって」

祥子がひどく悲しげな目で一真を見やった。今にも泣きそうな表情だった。

「おじいちゃん、どう答えたんだ？」

「しかたないって。自分ではどうしようもないんだって。描きたくて描きたくてたまらない。自分の中に鬼がすんでいて、描け描けと騒ぎ立てているようなんだ。おまえたちには本当に申し訳ない。けれど、どうしようもないんだよ、一成。泣きながらそう言ったって。それから数日後におじいちゃん、また、家を出て行って北海道に渡り、そのまま……。おばあちゃんもそれから四年後に亡くなったの。働きづめに働きとおした、その疲れが身体を蝕んでいたのね。まだ五十になるかなら

ないかという歳なのに、髪は真つ白になっていたそうよ。もちろん、お父さんや伯父さんの苦勞も並大抵ではなかったけれど……一真、あなたが心を惹かれた花火の絵ね。あれ、おじいちゃんの作品よ」

「えっ？」

漆黒の空に鮮やかに咲いた火の花。あれは祖父のものだったのか。

「おばあちゃんが一枚だけ大切に取っておいたものなの。天井裏の物置にしまっておいたんだけど、あなた、そこで見つけたのね」

「今も……あるの？」

「たぶん、あると思う。捨てないでくれておばあちゃんの遺言だったらうれしいから。一真、^③お父さんね。あなたが絵に夢中になるのが怖いよ。おじいちゃんみたいになるんじゃないかって怖いよ。お父さんの気持ち、わかってあげてよ」
今度は祥子がうつむく。うつむいて、長い息を吐き出した。

水音がした。

我に返る。

久邦が見事に浮輪の穴に飛び込んでいた。

「おーっ、すごいすごい。ヒサ、特技じゃん」

「ほんとに、すごい」

美穂と杏里が拍手をしている。二人とも水しぶきを浴びて、びしょびしょになっていた。杏里が笑っている。陽光がまぶしい。水がきらめく。

この風景を描きたい。カンバスの上に思いつきり描きたい。

祖父のこと、父のこと。「お父さんの気持ち、わかってあげてよ」。

頭の中でさまざまなのが、うずまく。目眩がしそうだ。

杏里が一真に顔を向けた。視線がからむ。

描きたいのだ。この少女を描きたいのだ。

「④ おれ、どうすればいいんだ」
思わずもらしたつぶやきが、青い空に吸い込まれていく。

……中略……

壁際には、古い家具が並んでいた。

取っ手のとれたタンス、ほこりをかぶった箱形のテレビ、脚の取れた小さなちゃぶ台。

どれも傷んで、ぼろぼろになっている。今では、古道具屋でしかお目にかかれないような代物だ。

「屋根裏部屋には、おばあちゃんの遺品が置いてあるわ。その中に、おじいちゃんの絵があるはずよ」
鍵を手渡しながら、祥子が言った。

「あの花火の絵が……」

「そう。あの絵ね。おばあちゃんもとても気に入っていたんですって。この絵だけは保管して欲しいって、何度もお父さんに頼んだそうよ。お父さん、仕方なく、おばあちゃんの遺品といっしょに屋根裏にしまい込んだの。まさか、あんたが見つけるなんて。見つけて、心を惹かれるなんてねえ……」

祥子はそこで深いため息を吐いた。

「こういうことって……、何て言うんだろう、運命？ そう、運命ってほんとうに、あるのかしらね」

祥子は考えるように、しばらく目を伏せた。それから、顔を上げ一真の肩を手のひらで叩いた。

「⑤ 運命か、そうでないのか、あんたの目で確かめてきなさい」

うなずいて、鍵を握りしめた。そして、今、ここにいる。

どこにあるのだろう。あの絵は。

薄暗い室内に視線を巡らせる。目を凝らす。

タンスの後ろに白い布の包みが見えた。四角い大きな包みだ。一真は近寄り、そっと引き出してみる。

白布で梱包されたカンバスだ。

手触りでわかる。五十号のカンバスだ。

布で巻かれ、荷造り用のロープが十文字に掛けられている。いかにもおざなりな梱包のしかただった。

⑥ 親父の絵なんて、見るのも嫌だ。

一成のつぶやきが聞こえる気がした。
ロープをほどき、布を取り去る。

「あ……」

息を飲みこんでいた。心臓が鼓動を打つ。その音が耳に響いた。

どくん。どくん。どくん。

花火の絵だった。

夜空を背景に無数の花火が開いている。あるものは丸く、あるものはしだれ柳のように、あるものは噴水に似た形で。

花火と空より他のものは何も描かれていなかった。人も建物も木々も岩も、何一つない。花火だけしかない。

紅、橙、臙脂、黄色、金色、碧、青……そして、言葉では表せない無数の色が五十号のキャンバスいっぱいには広がっている。

迫力があつた。美しいとか上手いとかではない。見る者を圧倒するような迫力があつた。花火一つ一つに生命があつて、その生命をせいっぱい、見せつけているようだ。

大きな力、大きな何かが、こちらにぐいぐいと迫つて来る。

これは祖父の執念だろうか。一瞬のうちに消えてしまう花火をキャンバスに永遠に留めようとする執念だろうか。

一瞬を永遠にしてしまふ。

祖父はそんな執念に突き動かされて、この絵を描いたのだろうか。

わからない。考えてわかることではないのだ。

どんな人だったんだろう。

家族も家庭もするほど絵にとりつかれた祖父とは、どんな人だったのだろうか。

汗が滴り落ちる。

身体中を汗で濡らし、
⑦ 一真は祖父の遺したキャンバスの前に立ち尽くしていた。

「へえ、おまえのじいさん、そんなすげえ人だったのか」

久邦がペットボトルの水を飲みほし、口元をぬぐう。

「すげえかどうかわからないけどな」

「その花火の絵、見てみたいな」

美穂が空を見上げる。

一真、久邦、美穂、そして、杏里。四人は水鳥公園の雑木林の中にいた。杏里と美穂はベンチにこしかけ、一真と久邦はブナの根本に座っている。今日も朝から太陽がぎらつき、最高気温は三十五度近くまで上がるらしい。けれど、雑木林の中はひやりと冷たい。池の水面を渡った風がそのまま吹き込んでくる。久邦曰く「無料の天然休憩室」だった。

杏里がオレンジジュースの缶を握り、身を乗り出してきた。

「お父さんは、市居くんが屋根裏部屋に上がったこと、知ってるの」

「ああ、知ってる。というか、おれが親父に話した」

「自分から話したんだ」

「うん」

「お父さん、なんて？」

「うん……」

夜、仕事から帰ってきた父と向かい合った。屋根裏部屋に上がり、祖父の作品を見たこと、圧倒されたこと、自分もまた絵の道に進みたいと思っ**て**いること。全てを隠さず話した。そして、最後に⑧ 一番大事なことを伝えた。

「おれ、じいちゃんの絵に圧倒された。最初に見た時もガキだったけど、ガキなりにすごい衝撃を受けたんだと思う。それは事実なんだけど、でも……何というか、わかったんだ。おれの描きたいものとは全然、違うんだって。どこが違うかうまく説明できないけど、おれは、じいちゃんを追いかけられるんじゃないかって、おれの描きたいものを描いていきたいんだ。じいちゃんのように急がない。ゆっくりと自分が選んだ道を進みたいって、そう思っている。父さん、おれ、自分で選びたいんだ」

一成は黙っていた。黙ったまま、息子を見つめている。

「あなた、お願い。一真の言うことを」

「おまえは口をはさむな」

祥子の言葉をびしゃりと遮って、一成はもう一度、息子を見つめた。

「描きたいものが、あるわけか」

「うん、ある。人物なんだけど、どうしても描きたい人がいるんだ」

「自分で選んだ道をなんて、そんなに甘いものじゃないぞ。いつまでも夢だけじゃ生きていけない。現実 is 厳しい。おまえが思っている何十倍もな」

わかっているとは答えられなかった。現実の過酷さも非情さも、何一つ知らないのだ。でも、描きたかった。描くことを諦めたくはなかった。諦めるつもりもなかった。

「好きにしろ」

一成が立ち上がる。ふいっと横を向いた。

「そのかわり、自分で道を選んだのなら泣き言は言うな。失敗しても挫折しても、誰かのせいにはできんだ」

⑨ 今度は答えられた。

「わかってる」

杏里がふつと身体力をぬいた。

「すごいね、市居くん。お父さんにちゃんと伝えられたんだ」

「ちゃんとかどうかは、わかんないけどな」

「伝えようとしただけで、すごいよ」

「どうかな」

久邦が真顔で言った。

「まだ始まったばかりだぜ。すごいかすごくないか、何もかも、これからだよな、一真」

「おつ、ヒサ、今日はやけにクールじゃん」
美穂がにやりと笑う。

「けど、その台詞、何かのドラマで聞いたことあるんだけど」

「いてっ。ばれちやった。いててて」

久那が頭を抱える。杏里と美穂の笑い声が重なった。一真も笑う。

そうだ。まだ、始まったばかりだ。何もかもこれからだ。

⑩ 一真は顎を上げ、深く息を吸い込んだ。

(あさの あつこ「夏の日差しは」『一年四組の窓から』 光文社)

問一 —— 線部①「やはり、おじいちゃんの血を引いているのかしらね」とありますが、母の様子はなぜ「やはり」と感じ
たのですか。説明しなさい。

問二 —— 線部②「気恥ずかしさなど吹っ飛んでいた」とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。

問三 —— 線部③「お父さんね。あなたが絵に夢中になるのが怖いよ。おじいちゃんみたいになるんじゃないかって怖い
のよ」とありますが、父は一真がどのようなことを恐れているのですか。最も適当なものを次のア～オから選び、
記号で答えなさい。

ア 絵を描くことに魅入られてしまい、家族や周りの人を不幸にしてしまうようになること。

イ 自分でも止められないくらい、絵を描くことに魅入られてしまうようになること。

ウ 絵を描くことに取り憑かれてしまい、家族を捨てても平気なほどの鬼のような心を宿してしまうこと。

エ 絵を描くために日本中を放浪し、遠い地方で事故死してしまうような人生を歩んでしまうこと。

オ 絵を描くことしか考えられなくなり、自分が周りに迷惑をかけているという自覚すら持てなくなること。

問四 —— 線部④「おれ、どうすればいいんだ」とありますが、一真はなぜ「どうすればいいんだ」と悩んでいたのですか。
説明しなさい。

問題三

次の①～⑩の——線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

- ① あまりコウフンすると眠れなくなる。
- ② 兄は休日^をへんじョウして働^き続^けた。
- ③ 羊がムラ^がつて牧草^を食^べてい^る。
- ④ 銀行にお年玉^をアズ^けに^行く。
- ⑤ 長年^にわたる研究^のコウセキ^が評^価さ^れた。
- ⑥ 父は鋼^のよう^な強^い心^を持^ってい^る。
- ⑦ 彼の^かれ^の発^言には潔^さがに^じみ出^てい^る。
- ⑧ 店頭^に並^んだ皮^革製^品を物^色す^る。
- ⑨ 関西風^のお雑^煮を食^べてみ^{たい}。
- ⑩ 上^辺だけ^の人^間には^なり^たく^ない。

問題四

次の①～⑤それぞれが四字熟語になるよう、例にならって、○と□に対立する意味を持つ漢字一字ずつを答えなさい。

【例】 半○半□ ↓ 半~~死~~半~~生~~】

① ○変□異

② ○令□改

③ ○同□異

④ 徹^{てつ}○徹^{てつ}□

⑤ ○名□実

問題五

次の①～⑩は外国のことわざですが、似た意味のことわざが日本にもあります。それぞれ後のア～シから選び、記号で答えなさい。

- ① 卵を割らずにオムレツを作ることはできない。
- ② プリンの味は食べてみなければ分からない。
- ③ ヒナがかえらぬうちに数えるな。
- ④ 楽に入るものは楽に出ていく。
- ⑤ 娘を得んとすれば、母親から始めねばならぬ。
- ⑥ 雑草ははびこりやすい。
- ⑦ ミルクをこぼして泣いてもはじまらぬ。
- ⑧ コックが多いとスープがまずくなる。
- ⑨ ネコがいないとネズミが跳ね回る。
- ⑩ ローマではローマ人に倣え。

- | | | | |
|---|-----------------|---|-------------|
| ア | 悪銭身につかず | イ | 石の上にも三年 |
| ウ | 鬼の居ぬ間に洗濯 | エ | 郷に入っては郷に従え |
| オ | 将を射んと欲すればまず馬を射よ | カ | 船頭多くして船山に上る |
| キ | とらぬたぬきの皮算用 | ク | 憎まれっ子世にはばかる |
| ケ | 覆水盆に返らず | コ | まかぬ種は生えぬ |
| サ | 弱り目にたたり目 | シ | 論より証拠 |